

## 吉田忠七をめぐる謎

— 伊豆沖か、薩摩沖か? —

吉田忠七は佐倉常七、井上伊兵衛とともに京都府派遣の伝習生として明治五年、リヨンに渡航している。

「工師」つまり機械工という位置づけであった。三人のうちでは一番年少で、佐倉、井上帰国後も許されて半年間、染法の伝習を続けることになっていた。

『京都府史』から読みとれる吉田忠七像、そして西陣物産会社に宛てた、彼自身によるリヨン到着第一信の文づかいからは、学職の豊かさが滲んでいる。

太田英蔵氏の考証によれば、空引機による西陣織の技術書『西陣織物詳説』『西陣織物図説』の編纂者は竹内作兵衛、図説の原図作成者は吉田忠七であるという。彼は糸商の番頭であったが、織機の研究をひそかに続けていた。腕一本の機織職人、佐倉、井上とちがって彼は読み書きもでき図面も描けたのである。だからこそ民費の伝習生として加えられたのであろう。

忠七は明治七年三月、伊豆沖で座礁したフランス船ニール号とともに没したというのが定説である。果して真実だろうか。疑ってみる余地はある。溺死をまぬがれた仏人の証言のみが根拠で、死体の確認も行わ

れておらず遺留品の捜査からも確証は得られていない。伊豆沖に達した三月二〇日から逆算すると、六カ月の伝習期限にもかかわらず、わずか三カ月でリヨンを発っている。さらに大日本織物協会会報掲載の「織界の隠士佐倉常七君伝」によれば、忠七の遭難現場は「薩摩「イツガ浦」沖」となっている。謎は深まるばかりである。私は色めき立って、古地図を



一八六四年就航当時のニール号

ひっかき回して、およそ一カ月その調査に費した。だが「イツガ浦」はついに発見できなかった。

私の落胆は大きかったが、もしかしたら彼、吉田忠七の遭難は「伊豆沖」でも「薩摩沖」でもなかったのではないか。案外リヨンで長寿を全うし、むなしく徒労に終わった私を、天国で嘲笑しているかも知れないと思ってみたりする。（福本武久）